

## 対話における応答詞「あ」の機能：

### 発し手にとっての「新規情報」は相互行為にどう利用されるか？

細馬宏通（滋賀県立大学人間文化学部）

#### 1. はじめに

##### 1.1 知識状態変化を表現する応答詞「あ」

「あ」という応答詞は、日常会話で頻出する。にもかかわらず、声門閉鎖によって母音を短く切りつめただけの単純な語ゆえに、自立語のような「意味」を見いだすのが難しい。

応答詞「あ」を扱うための有力な枠組みとして、話者の知識状態に注目するアプローチがある。

たとえば 田窪・金水(1997)は、応答詞を心的情報処理過程の表現としてとらえ、「あ」の機能として「予期されていなかったにもかかわらず関連性の高い情報の存在を新規に登録したということを表している」としている。

応答詞が話者の知識状態を示していることを、発話の連鎖においてとらえたアプローチとしては Heritage (1984) の” Oh” に関する分析がある。また西阪 (1997, 1999) は、Heritage の議論を受けて、知識状態変化を表現する応答詞としての「あ」が、「いまわかった」ということを示すと同時に「それまでわかっていなかった」ということを明らかにすることについて考察している。

音声のみの会話を問題にする場合、知識状態変化をもたらした原因(本論では以下、ターゲット target と呼ぶ)、および変化の結果をその前後の発語に求めるのは自然なことである。じっさい、知識状態変化の問題は、これまではもっぱら発語のみを手がかりに議論されることが多かった。

しかし、日常会話では、発語以外の環境内の情報に対して「あ」が発せられることがある。たとえばスーパーマンの姿が目飛び込んできたときに「あ、スーパーマンだ」と発するケースはこれにあたる。この場合、「あ」の直前に起こった環境内のできごと(スーパーマンの登場)が「あ」のターゲットであり、「あ」に続く「スーパーマンだ」という語(およびそれに伴う指さし行為)が、知識状態変化の結果ということになるだろう。

さらに対面相互行為では、お互いの音声以外のさまざまな行動が知識状態変化をもたらし、「あ」を発する原因となる。そして、「あ」に続くことばは、知識状態の変化

を表すとともに、次なる行為を指示する。たとえば、相手の伸ばした手に対して「あ、そっちじゃないよ」という場合には、相手の行為(手を伸ばすこと)がターゲットであり、「そっちじゃないよ」という発語は知識状態変化の結果を表すとともに、相手の次なる行為を指示する。

Clark & Krych (2004) は、共同作業において、発語と同時にさまざまな非言語活動が協調的に起こっていることを観察し、知識状態変化がいかにかに共有されるかについて論じている。このような議論は、日本語の「あ」の場合にも有効だと考えられる。

にもかかわらず、相互行為における非言語行動と応答詞「あ」の組み合わせがどのような機能をもつのかについては、これまであまり論じられてこなかった。

「あ」をめぐるもうひとつの問題は、しばしば同様のものとして扱われる” Oh” と「あ」との音声学的な差異である。Local (1996) の記述している” Oh” は短いものでも0.2s、多くのものは1s前後の発語長をもち、しかもピッチ変化に富んでいることが多い。いっぽう、「あ」は前後を声門閉鎖(glottal stop)によって挟まれた0.1s-0.2sのごく短い音であり、明確なピッチ変化はほとんどない。こうした差は、単なる長短の問題なのか、あるいは、二つの語の機能差に由来するのかは、これまで注目されてこなかった。

以上の問題点をふまえ、本論では、共同作業を行う実験下で発せられる応答詞「あ」に注目し、「あ」がじっさいの会話のなかでどのような音声学的形態を持ち、どのような前後関係とともに発せられるか、そして聞き手はどのようにこの「あ」を利用するかについて論じる。

#### 2. 方法

##### 2.1 調査対象と実験時期

実験は、対話者の一人の頭についた小さなゴミの位置を、向かい合ったもう一人が教えてあげる、という場をシミュレートしたものである(細馬 2004)。

実験は2004年5月、6月に行なった。被験者は大学生30人(男性8人・女性26人)を2人1組のペアにした計15組である。

## 2.2 実験手続き

### 条件1：対面条件

被験者ペアには対面して座ってもらう。以下、ペアの一人を「作業者」(X)、もう一人を「指示者」(Y)と呼ぶ。

作業者(X)には、ヘルメットをかぶってもらう。ヘルメットには直径7ミリの小さなシールが貼られており、その位置は中心から上下左右にいくらかずれている。Xは自分のかぶっているヘルメットのどこにシールがあるのかをあらかじめ知らないし、見ることもできない。

指示者(Y)は、Xと向かい合う位置に座っており、Xのヘルメットについてのシールを見ることができる。Yは身振りをまじえながら、Xのヘルメットについてのシールの位置を教える。ただし、Xのヘルメットを直接指さすことは禁じられている。

Xは、Yの発語やジェスチャーを手がかりに、人差し指一本でヘルメットを触りながらその位置を探る。このとき人差し指以外でヘルメットに触ることは禁じておく。

Xの人差し指がシールを探りあてたら、Xに手をあげてもらい、課題は終了となる。

### 条件2：モニター越し条件

XからYが見えないように、Yには衝立の反対側に移動してもらう。

条件1と同様に、参与者Xにシール付きのヘルメットをかぶってもらう。Xの正面から胸から上をビデオカメラで撮影し、衝立の反対側にあるモニターに流す。Yはこのモニターを見ながらXの様子を観察し、ヘルメットのどこにシールがあるかを衝立越しに口頭で指示する。XとYは互いに声を交わすことができ、XはYの声のみをたよりに人差し指でシールの位置を探る。以下は条件1と同様に進行する。

被験者1ペアにつき、条件1、2のそれぞれについてXとYの役割を交替し、計4回の課題を行なった。条件の順序効果を排除するため、ペアにより課題の順番を入れ替えた。また、シールの位置による偏りを排除するため、四種類のシール配置を用いた。

## 3. 結果

### 3.1 単独発語型「あ」と連続発語型「あ」

「あ」の平均発語長および最小・最大値は、 $M=0.11s$ ,  $Min=0.02s$ ,  $Max=0.24s$  ( $N=104$ )であった。さらに、後続の語との間のポーズ長を見ると、「あそう」「あストップ」のように、続く語とほとんど間をおかずに発せられ

る連続発語型のもの、「あ・・・あった」のように単独に間をおいて発語される単独発語型とが観察される。

試みに、連続か単独かを、次の語との間のポーズが0.1s未満/以上で分類すると、連続発語型の平均発語長および最小・最大値は  $M=0.102s$ ,  $Min=0.052s$ ,  $Max=0.164s$  ( $N=43$ )となり、いっぽう単独発語型の平均発語長および最小・最大値は  $M=0.128s$ ,  $Min=0.066s$ ,  $Max=0.239s$  ( $N=61$ )となり、連続発語型のほうが単独発語型よりも短く発語される傾向があることがわかった。

ターン・テイキングに注目すると、話者交替( $N=11$ )はいずれも単独発語型でのみ起こっており、連続発語型に対しての割り込みは今回は観察されなかった。

### 3.2 共同作業の役割別にみる単独・連続型の頻度

単独発語型と連続発語型とで使用頻度を比較してみると、被験者の役割(作業者/指示者)によって異なり、指示者では作業者に比べて、連続発語型の使用頻度がかかった。また、実験条件別に見ると、指示者の場合、モニタ条件のほうが対面条件よりも連続発語型の頻度が増えた。

被験者	実験条件		計
	対面条件	モニタ条件	
作業者(X)	13	13	26
指示者(Y)	19	16	35
計	32	29	61

表1. 被験者の役割別、実験条件別に見た単独発語型「あ」の頻度

被験者	実験条件		計
	対面条件	モニタ条件	
作業者(X)	3	5	8
指示者(Y)	14	21	35
計	17	26	43

表2. 被験者の役割別、実験条件別に見た連続発語型「あ」の頻度

モニタ条件で指示者(Y)の身体行動は作業者(X)から見えないことを考慮に入れると、指示者(Y)による連続発語型の頻度増加は、指示者(Y)の身体行動の代替になっている可能性が考えられる。

単独・連続の「あ」とも、多くの場合、発語者が続けてターンをとっている点から、「あ」は、単に知識状態変化を独立に示すだけではなく、そのあとになんらかの発語が続く傾向があることがわかる。このことは1.1で考察したことを傍証している。

応答詞が「あ」が話者の知識状態の変化を表す語だとすれば、それに続くことばには、知識状態変化後の話者の状態が表れている可能性がある。では、「あ」に続く発語は、じっさいにはどのようなものなのだろうか。

作業員、指示者それぞれについて、「あ」のあとにどのような語が続くかを調べてみたところ、作業員に特徴的な「あ」は、「あった」「さわれた」など、シールに実際触った直後に発せられるものが多く、さらに、応答詞を「あ、あ」「あ、あー」のように「あ」が連鎖するタイプが目立つことがわかった。

一方、指示者に特徴的なのは、作業員の行動を制御するような語（「もうちょい」「逆」「ストップ」）が多いことがわかった。

## 4. マイクロ連鎖分析による考察

### 4.1 作業員による「あ」の連鎖

以下では、事例を連鎖解析しながら、さらに結果を詳しく考察していこう。

【会話例3（観察例：モニタ条件 helmet11-4）】

Y1: それぞれそれそれ  
 →X2: [あ]、あ、あ  
 Y3: はいはいはい

会話例3は、作業員Xがシール付近で指を動かしながら「あ」および「あー」をつぎつぎと発語した後に「あった」と言うまでの一連の会話である。では、この断続的に発せられる「あ」にはどのようなはたらきがあるのだろうか。

Y1では、Xの人差し指はシールの上にとどりついており、それに対してY1はモニタ越しに「それぞれそれぞれ」とことばによる指示を行っている。ここで興味深いのは、Xの指がいったんシールからわずかに離れて、また戻ってくることである。

この動きをさらに詳細に見ると（図1）、X2での3つの「あ」と人差し指の動きはそのつど微妙にずらされていることがわかる。一度めの「あ」はシールの外側から内側に向けて人差し指を動かしながら、まさにシールの縁に指が触った時点で発せられる（図1 S1）。そして二度めの「あ」はシール上で指が止まっている状態で発せられる（hold）。さらに三度目の「あ」は、人差し指がシールの内側から外側に動き（S2）、そのあと止まった際（hold）に発せられる。

つまり、単純に均質な動きが「あ」と同期しているのではなく、シールの外側から内側、内側、そしてシールの内側から移動した結果の外側という、三つの異なる状態に三つの「あ」が同期しているのである。

この一連の「あ」は、自己の行動の結果を知識変化ターゲットとする、一種の知識変化の連鎖として考えることができる。第一の「あ」は、それに同期する行為をターゲットとし、第二の「あ」およびそれに同期する行為

に注意を向けさせる。第二の「あ」は、さらに第三の「あ」およびそれに同期する行為に注意を向けさせる。複数の「あ」とそれぞれに伴う行為は、このような知識変化の連鎖の束として受け取られることができる。

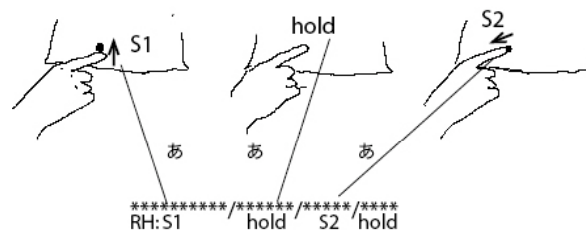


図1 会話例3における作業員Xの「あ」連続発語(X2)と人差し指の動きとの関係

では、会話例3のX2における知識状態変化は、聞き手であるYははたして適切にXの知識変化を理解しているだろうか。おそらくそうであることは、XとYの3-5行目の発話から推測できる。Y3はY1とは異なり、もはや指示語をつかわずに相手の行為を肯定する「はいはいはい」という発語に変わっているからである。

### 4.2 作業員の分節化が指示者の「あ」を産む

この実験では、作業員はシールに触るまで、それがどこにあるかを知らない。したがって、シールの位置に関する情報はもっぱら指示者の側から提供されると考えられる。

しかし、共同作業に必要な情報は、シールの位置のみではない。以下の例を見ながらこの問題について考えてみよう。

【会話例4（観察例：対面条件 helmet14-2）】

Y1: あ、もう、そのもうちょっとした

指示者Yの発語Y1は、単に作業員の動いている最中に発せられたのではない。作業員は、ヘルメット上で人差し指を斜めに動かしたあと、いったん指の動きをとめるのだが、Y1はまさにこの指が止まった瞬間に発せられている。つまり、指示者が「あ」といったために作業員が止まったのではなく、逆に、作業員がいったん動きを止めたその瞬間に、指示者が「あ」といっているのである。表4における指示者の単独発語型の「あ」では、発語に先立って、このような作業員の動きの停止が起こっていることが多い。

作業員は、単に指示者の発話に従って指を動かしたり停止したりしているだけではない。自発的に行為を断続させ、動きの停止をあちこちに起こすことによって、作業員に「あ」を発せさせる機会を作っているのである。この結果、作業員の「あ」は、ヘルメット上の特定の停

止位置をターゲットとすることができ、そこを起点として次なる指示を与えることができる。

シールの位置という情報じたいは、指示者によって一方的に把握されている。しかし、そこにたどりつくためにどのような作業を行えばよいかは、指示者の行為のみならず、作業者の行為によっても調節されているのである。

作業者の自発的な動きの停止は、シールの発見時にも見られる。

#### 【会話例5（観察例：モニタ条件 helmet15-3）】

（作業者Xの人差し指がシール上にたどりついて止まる）

Y1: あ

X2: あ

（Xの人差し指はシール上を丸くなぞる）

Y3: そこ

作業者は、自発的にシールの真上で指を停止させ、その直後に指示者は「あ」を発する。つまり、指示者は作業者の動きを止めたのではなく、作業者の動きの停止をターゲットとして「あ」を発していることになる。4.2で見たような、作業者による相互行為の調節は、シールの発見時にも起こっているのである。

ここで興味深いのは、Y1とY3のあいだに、作業者による「あ」という発語がはさまっている点である。

X2はY1の直後に発せられており、しかもX2に続けて、作業者はシール上を指でなぞり始める。すなわち、作業者は直前の作業者による「あ」（そしてその「あ」がターゲットとしている、シール上で停止している自分の指）をターゲットとし、さらに、指をシールの上でなぞることで、知識状態変化を表していることになる。

指示者は、このような作業者による知識状態変化の直後に「そこ」と発語する。X2がはさまることで、Y3「そこ」という発語は、単にY1の「あ」における知識状態変化を表すだけでなく、作業者Xの身におこった知識状態変化をターゲットとし、それが自らの知識変化の原因であることを明らかにする。つまり、ここでは、相手の知識変化を自分の知識変化の原因とすること、すなわち、「承認」が起こっているのである。

話者間の「あ」の連鎖は、二者のあいだに知識状態変化の連鎖を引き起こし、そのことで、お互いの行為および知識状態変化をターゲットとしあうことで、共同作業の知識共有に役立っていると考えられる。

### 4.3 まとめ

ここまで、知識状態変化を表す発語としての応答詞

「あ」を考えながら、二者の共同作業における「あ」がどのような機能をもつかを素描してきた。

共同作業においては、自分の行為および相手の行為の結果じたいが知識状態を変化させる。この変化を「あ」によってしるしづけることによって、次なる発語に注意を向けさせることができる。そしてその次なる発語は、単に知識状態変化の結果を表現するだけでなく、変化に対する次なる指示として機能しうることになる。

本論の考察で見た相互行為は、いずれも0.1s単位のすばやいものである。「あ」の短さは、おそらくこうしたすばやい動きと緊密な関係をとるために有効だろう。なぜなら短くなることによって、それがいかなる行為と同期し、いかなる行為をターゲットとしているかがはっきりするからである。

### 参考文献

- Clard, H. H. and Krych, M. A, (2004). Speaking while monitoring addressees for understanding. *J. Memory and Language*, 50, pp.62-81.
- Heritage, J. (1984). A Change-of-State Token and Aspects of its Sequential Placement, in J. M. Atkinson and J. Heritage (eds.), *Structures of Social Action: Studies in Conversation Analysis*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 細馬宏通. (2004). 身体を示し合う会話 -自分の身体で相手の身体を語ること-. 社会言語科学会大会第14回大会論文集 67-70.
- 西阪仰. (1997). 相互行為分析という視点. 金子書房.
- Local, J. (1996). Conversational phonetics: some aspects of news receipts in everyday talk, in E. Couper-Kuhlen and M. Selting (eds.), *Prosody in conversation: Interactional studies*, Cambridge: Cambridge University Press.
- 田窪行則・金水敏. (1997). 応答詞・感動詞の談話的機能. 音声文法研究会(編), 文法と音声 (Pp. 257-279). くろしお出版

連絡先 細馬宏通 〒522-8533 彦根市八坂町2500 滋賀県立大学人間文化学部 [hhosoma@shc.usp.ac.jp](mailto:hhosoma@shc.usp.ac.jp)